

# 市川の歴史

発行：八戸市立市川中学校地域学校連携協議会  
 校長：馬渡教二 会長：小向龍悦

## 〈市川の歴史年表②〉

西暦	和 暦	で き ご と 等
1718	享保3年 <small>きょうぼう</small>	疫病流行により98名病死。37軒のうち7軒が空家となる。
1739	元文4年 <small>げんぶん</small>	藩主の南部利視 <small>なんぶとしみ</small> 公が、お忍びで下風呂から三沢を通り、 <u>下市川に泊まる。</u>
1740	元文5年 <small>げんぶん</small>	<u>圓子嘉右衛門</u> （盛岡藩五戸通の在地家臣）が、藩から五戸市川新田の開発を命じられて事業を開始。 <small>（主として五戸川の左岸）</small> 上市川の池ノ堂から取水。幕末の万延元年（1860）には、約81畝の新田が開かれた。 <b>（田畑・山林・漁場が一体となった事業）</b>
1751	宝暦元年 <small>ほうれき</small>	「市川新田」で、約22畝の新田が開かれた。この年貢は藩主の私的財産として収納されたが、 <u>圓子嘉右衛門は万が一に備えて、蓄えていた。</u>
1755	宝暦5年 <small>ほうれき</small>	市川浦で、湊村と白金村の漁船43艘が遭難。 <small>（しらがね）</small>
1788	天明8年 <small>てんめい</small>	幕府の巡検使：「市川はようよう30軒ばかりの在所なり。橋向から1493間の間、左右野平。畑は、市川付近に少々あり。」と記録している。
1801	享和元年 <small>きょうわ</small>	幕府の御用測量家である伊能忠敬 <small>いのうただたか</small> が、 <u>市川村に宿泊。</u> 日記には「兵太の家」。その後、百石から浜三沢を <u>通</u> って北上。
1803	享和3年 <small>きょうわ</small>	「下市川村の家数は100、そのうち本村53、支村：高屋敷7、轟木20、和野6、新田4、赤畑4、尻引6、（五戸通に属す）」
1806	文化3年 <small>ぶんか</small>	市川海岸に鯨99頭があがる。文化5年に「漁光大明神」の石碑
1829	文政12年 <small>ぶんせい</small>	<b>市川湊が、諸荷物積出港に指定</b> される。藩政末期には、市川に商人宿が二軒あった。（泉屋善太郎・吉田屋金兵衛）
1832	天保3年 <small>てんぽう</small>	<b>天保の大飢饉</b> が始まる。向谷地在住の佐々木太郎左衛門はその様子を「 <b>天保三辰ヨリ七ヶ年凶作日記（市川日記）</b> 」として記録。平成18年には、その原本が <b>県重宝に指定</b> された。
1836	天保7年 <small>てんぽう</small>	<b>藤田又右衛門</b> 、市川前谷地開墾のために上市川村の神明河原より取水、安政3年（1856）に用水路（後に <b>又右衛門堰</b> ）が完成。21年間の工事の後に、主として <b>五戸川右岸</b> に160町歩の水田ができる。現在は360町歩。尻引に開墾記念碑あり。
1838	天保9年 <small>てんぽう</small>	幕府の巡検使が、吉田源右衛宅（ヤマジョウのご先祖）に宿泊

八戸市立市川中学校地域学校連携協議会教育コーディネーター：木村 隆一

参考資料：「日本歴史地名体系②」 「新編八戸市史・地誌編」  
 「百石町史」 「五戸町誌」 「流れる五戸川」 ほか

